

ムーニエ再考、協同と連帯の思想

1. ムーニエのプロフィール

ムーニエについては犬養道子さんが岩波新書の『ヨーロッパの心』の中でエマニエル・ムニエルと紹介していますが、シタビラメモニエルといいますが、私はムーニエだと思って話しをさせていただきます。

今年は奇しくもムーニエの生誕百年でして、1905年生まれというのは今年いろいろと取り上げられています。J.P.サルトルが同じ年で生まれています。またサルトルの親友でポール・ニザンというのがいます。現在その親戚筋、お孫さんに当たるのか、エマニエル・トッドという人口学の学者がいます。ニザン、政治学者のレイモン・アロンも1905年生まれでして、サルトルの女友達というか奥さんのポーボワールとか哲学者のメルロー・ポンティは数年下の年齢でということで、ちょうど百年ということですから、ムーニエが古い思想家とは言えないと思いますが、私は「ムーニエ再考」ということですが、本当はSuperieurで最高ということにしたかったのですが、ワープロ変換したら再考がでたのでこちらを使うことにしました。

協同と連帯の思想ということで、まずムーニエの思想ということで、彼のパーソナルヒストリをご紹介したいと思います。1905年にフランスの東南部にあるグルノーブルに生まれました。父は薬剤師で母は農家出身の方のようです。大変、勉強ができたようで、当初、本人も家族も医者にさせたかったということでした。大学はソルボンヌに入って、22歳の時にアグレガシオンという大学教授資格試験に合格しました。一番がレイモン・アロンで、二番がムーニエだった。この時は、ポーボワールの回想記によれば、サルトルは意外にも落ちてしまって、翌年トップで合格したということです。ですから、ムーニエはかなり成績のよい学生であったといえます

世界情勢を見ると、1926年はムッソリーニのファシズムがでて、日本では昭和天皇が即位する年でした。1927年にムーニエがアグレガシオンに合格した年にはハイディガーの「存在と時間」が刊行されています。当時、アグレガシオンに合格するとだいたい地方の高校リセの教員になる。これはサルトルもルアブルの高校教師になった。医師のインターンではないですけど、そういうコースがあってやがて大学の教員になっていくというものでした。ムーニエはイギリスに近いカレーでリセの教員になった。それで、1929年24歳のときに、アメリカで「暗黒の木曜日」という世界恐慌が発生しました。「暗い日曜日」という歌がはやったらしいですが、これによって世界の枠組みが変わったといわれます。ムーニエはグルノーブルにいる頃、またソルボンヌにいるころ、シャルル・ペギーという詩人思想家について哲学論文を書きます。これをベルグソンに送って、彼らコメントをもらいました。ムーニエは哲学研究ではベルグソンを中心に、ギリシャ哲学、トマスなどを勉強した。1930年あたりから雑誌を出すことを企画した。どうも当時、雑誌を出すことがひとつのブームというかある指向性をもって、流行していた。これは、シャルル・ペギーという人が、ドレフュス事件というものがあってフランスの国論という知識階級が二分されたときに、ドレフュスを支持する文学者たちがしましたが、ペギーもドレフュス事件を軸にして、フランス社会がどうあるべきかということ、フランスの新しいフランスということで、「新しい秩序」という概念をその頃主張した。つまり、ムーニエはペギーを研究する中で、その「新しい秩序」という概念を発展させていったのだと思います。

1930年頃から準備し、1932年に雑誌「エスプリ」という形になって発刊されることになります。1931年にムーニエはいわゆる大学教授路線を放棄しました。そのまま順調にいけば大学の先生になるという道を放棄して雑誌の発行に力を入れることになった。運動のほうに入っていきます。この点は戦後、サルトルとかレイモン・アロンとか「現代ルタンモデルヌ」という雑誌を発行しますが、私の評価からすれば、ムーニエはすでに戦前の1932年に「エスプリ」という雑誌を出しているわけで、はるかに先駆者であったし、時代にかなりコミットしていたといえます。

「エスプリ」は一般にはカトリック系の雑誌だと思われていますが、現在もフランス人にムーニエとか「エスプリ」はどうですかと聞くと、「あれはカトリッ

ク系だ」というコメントをもらうことが何回かありましたように、やはりそのように評価されているのかなと思いました。「エスプリ」は現在も発行されつづけています。創刊の時に「エスプリ」ではシャンティエという言葉、みんなが集まる場所ですね、そのような欄を作って、いろいろな人が集まって一緒に協同しようという、明確な発想をもっていました。ですから単なるカトリック系の思想を唱道するという意図の雑誌ではなかった。広く議論をあつめようという意図を持って作られた雑誌です。

話しは少し飛びますが、戦後にムーニエがサルトル、アロン、カミュなどと新しい雑誌を作ろうとしたときに、なかなか意見が合わなかった。ムーニエがみんなで雑誌をやろうとしたときに共同の雑誌ができなかった。そのためにムーニエはその後、これらの人々を批判する論文とか文学哲学評論のようなものを書きます。サルトル、カミュ、ベルナノスなどを批判しております。カミュについては「不条理」ということばはばかげていると批判していますが（冗句）。サルトルなどは戦争中、ま、あまり、ムーニエほどにはレジスタンスに加わっていないわけですね。ムーニエはいわゆるスペイン内戦が1936年に始まりますが、このときにも雑誌「エスプリ」の中でも論陣を張りまして、共和国側を支援した。たとえばアンドレ・マルローやモーリアックとかも支援した。モーリアックはカトリック系の作家と呼ばれていますが。比較的カトリック系の人たちが熱心にスペイン内戦の支援をしておりました。それでムーニエはまた、ナチズムによりフランスが1940年から占領されたときに、ビシー政府がビシーという町にできました。ドゴールはその時イギリスにいたわけですが。ペタンという元帥が四年間いわゆるドイツ占領下の中での政府を構成します。ムーニエにはもともとカトリック運動、カトリック若者運動などに関係していたのですが、ここでムーニエの評価についてフランスの一部の人たちは、カトリックはアクション・フランセーズ、カトリックフランセーズなどというものが、右翼的でナチズムに協力的な側面があったので、ムーニエを反動的な役割を果たした人物だという評価があります。

この評価はさかのぼれば、たとえば、ニザンが、彼は若いときに共産党に入ったわけですが、ムーニエたちの雑誌を、これは反動的な雑誌だと非難した。当時の共産党的な立場からだと思いますが、そういう断じ方をしたわけです。この問題は、ムーニエの役割は、図式的にカトリックが反動であり、コミューニズムや社

会主義が進歩的だという図式に立てば、そういえるかもしれませんが、実はそうではなくて、ムーニエはレジスタンスに参加して逮捕されます。ビシー政府の中で逮捕されます。一年くらい留置されて飢えを体験する。逮捕の理由は、一つはビシー政府のユダヤ人の取り扱いの問題、とくに反ユダヤ人宣伝映画をビシー政府が制作することにたいして、ムーニエは文句をつけた。またまた「コンバ」という雑誌が、カミュなどが出していたのですが、カミュは1908年アルジェリア生まれですが、レジスタンスに参加していたのです。リヨンは当時レジスタンスになの中心地だったといわれます。ムーニエはリヨンで逮捕されまして、その後、ナチの占領していたフランス北部だけではなくて、いよいよリヨンにもナチが進出してくるといいう時に、一週間か十日くらいまえに別の場所に移送された。ビシー政府も一枚岩ではなくてビシッとしていなかったわけで、ミッテランも政府の一員としていたくらいですから。ミッテランはその後レジスタンスにも関係するなど複雑な動きをしています。つまり当時の人々は非常に政治的に複雑な動きをしていたわけです。つまり、表では正規の職員の顔をして裏ではレジスタンスだとか、いろいろな組み合わせがあったと思われまます。ムーニエはレジスタンス運動に自ら積極的に関与した、という点では、その後の実存主義者たちすなわちサルトルとかメルロー・ポンティとかとは違いがあります。

ムーニエはリヨンにナチが入ってくる前にさらに南の方に逃亡していきます。しかし、ムーニエはフランス解放後、あまり長生きしなかった。1950年に45歳で死んでしまったことが、ちょっと残念なことです。戦後、サルトルなど民医連などと雑誌を出そうとしたときに、うまくいかなかったが、このときに世界的な文学者などにも呼びかけた。当時、パリにいたアメリカの黒人作家リチャード・ライトも引き込んで雑誌をつくらうとしていた。私の想像で、もしかすると、ムーニエとリチャード・ライト（私はこの作家にも関心がありますので）が顔を合わせて話し合ったのではないかという空想をしています。

2. ムーニエの宗教と政治

ムーニエは人格主義哲学と言われています。このベルソナという言葉は大変難しい言葉で私もよくわからないのですが、いわばキリスト教的な流れ、あるいは

近代思想的にいえば、パスカルを実存主義の系譜の根元にあると考えると、ペルソナという言葉は大変、哲学上重要だと思われます。ペルソナという言葉は、しかし、当時ムーニエだけが議論していたのではなくて、先ほど話しました、サルトルなどの実存主義、現象学派の人たちが議論している中の用語でもあったわけです。日本では三木清の「パスカルにおける人間の研究」という形などで現れています。人間、人格という言葉、ペルソナとかスピリチュアルという言葉は当時の哲学的共通テーマでもあった訳です。決してムーニエが突出して変わり者として議論していたということではなかった。

もうひとつ、私どもの協同組合の思想の中で重要な思想は、いわゆるキリスト教社会正義とキリスト教社会主義の流れです。1931年にピオ 11 世の回勅「クアドロヘシモアンノ」（四十年目）というものが出されます。日本では、「ここで会ったが百年目」という言葉がありますが、なにが四十年目かと言いますと、その四十年前の 1891 年に「レールムノバウム（新しい秩序、王国）」というレオ 13 世の回勅がでました。これが非常に重要なものでして、その二番煎じとして「クアドラヘシモアンノ」が出たわけです。「レールムノバウム」はもともとは当時の 1890 年代前後のヨーロッパというものを考えると、社会主義運動ができますし、資本主義システムが力を得ていく時代でした。ドイツですと少し前にビスマルクモデルのような社会保険制度ができるような流れがあった。

こういう中でカトリックが危機感を持って「新しい秩序」をキリスト教社会正義に基づいて構築していこうということで回勅が出された。この二つの回勅は、私の最後に触れる予定ですが、モンドラゴン協同組合のアリスメンディアリエタ神父の思想にも非常に反映しているものです。レオ 13 世の回勅の中身では、「日曜日にはちゃんと休め」とかいかにもキリスト教的な文言があつたりしますが、基本は、経済とモラルを統合すべきだという主張をしています。今、経済とモラルは分裂しているのだ、と。経済と倫理。我々風に言えば、社会的なもの、経済的なものの統合です。すなわち社会的経済という言い方になると思います。回勅では現状規定ではブレーキのない経済の自由とっています。この間ある横文字新聞にドイツの学者が「今の世界経済はブレーキのないベンツで走っているようなものだ」とコメントしていましたが、まさに同じ言い方が回勅においてすでになされている。さらに回勅では職のアソシエーションをもっと活用しようと述べ

ています。これはフランス革命で一時禁止されていたもののわけです。それから利益の最大限追求をやめようとも言っています。まさにNPOとか非営利という問題を提起しています。それから、他者を無視した個人主義をやめて、他者との連帯を強めよう、それから労働者階級の貧困を克服しようなどと回勅のはべておりまして、労働のアソシエーションの権利を強めることを主張しています。このアソシエーションは、英語読みですが、いろいろな内容を含んだ言葉です。たとえば、ワーカーズコープが念頭に浮かぶかもしれませんが。回勅ではさらに女性労働、社会保障、児童労働の禁止などの主張があり、最後にはカトリック的かもしれませんが階級闘争の否定が述べられています。この回勅が当時の非共産主義・社会主義的な運動、資本家的自由主義者たちに対抗する論理として出された。「一人より二人」、「団結と協同」といったスローガンが出された。

こうした中で、キリスト教社会主義運動がヨーロッパの中で一定程度影響をもつようになった。すでに、オウエン協会の会員の中からもそれらの関係の本や論文を出されている方もいらっしゃいます。D.H. コールもキリスト教社会主義運動の役割を彼の本の中でテーマとしていますように、評価できるものであります。1931年の回勅はしたがって、40年前の回勅をリニューアルし、敷衍して強化しようとしたものです。その間一番変わった情勢の変化は、ファシズムやコルポラティズムの出現でした。それでこうしたカトリック運動からは、全体主義の中に、ファシズムとコミニズムを入れて、ロシア・コミニズム、ボルシェビキ的コミニズムが入れられるのと、資本主義的横暴に反対していくという立場を取る。したがって、この二つの回勅はわれわれの言い方でいうと、当時のいまでいう社会的経済セクター、非営利・協同的なセクターに大きな影響を与えたものだと思います。

カトリックには右派もいるし左派もいるということです。政治的にはたとえばスペイン内戦ですとバスクのカトリックは共和派について、200数十人の神父たちが銃殺されるということもありました。モンドラゴンのアリスメンディアリエタもそれらのうちの一人でした。カトリック右派はスペインでいうとアクション・カトリカというものがあります。アリスメンディアリエタもアクション・カトリカの中で青年たちを指導していたわけです。そうすると、やはりアリスメンディアリエタもスペインの極左派から反動的人物であると非難されたわけです。ムー

ムーニエ再考、協同と連帯の思想

ニエもカトリックであるために、一部からは、彼はアクション・フランセーズに関係していたので、もうこの人はいけない人だというレッテル貼りがあったし、現在もそう考えている人もいます。しかし、ムーニエの政治的姿勢は、反ファシズム、反ボルシェリズム、それから反資本主義、反個人主義と言えます。この中でわれわれにとっては反資本主義というのが重要だと思います。反個人主義というのは、哲学的には個人主義というのが哲学的に複雑な問題があると思いますが、いわば、現象学や実存主義の関係とムーニエの考えを見るならば、人間を捉えるときに、ペルソナで見るのか、インディビデュアルで捉えるのかと点では、ムーニエは、人間はペルソナであって孤立したモナドとしての単一の個人というとならえ方で捉えるべきではない、という考えです。一人より二人。他人の存在の中で個人を捉えていくという手法を重視した。

一方、たとえば、現象学について、サルトルはナチ支配下のドイツにいて、フッサールを勉強する。メルロー・ポンティもベルギーですけれどもそこでフッサールを勉強する。いわゆるドイツ派の系統で戦後のフランス実存主義が出てくる。これは基本的にムーニエと彼らと共同ができなかったのは、哲学的スタンスが違った。ドイツ人はゼルプストという言葉が好きですよ。ドイツ協同組合の前文を読むとゼルプストという言葉が4回くらい出てきます。自助とゼルプストヒルフェとか、自己、ジツヒということからものを考えていく。哲学的な流れとしてはカント以来主流だと思います。ムーニエ的な発想は、したがって、従来の哲学的な本流からは外れていると思います。単純に言うと、ムーニエの論文の中には、オウエン、シャルル・ジードとかの名前が出てきて、社会の問題の議論が来ますけれども、たとえば、サルトルの文章の中でオウエンが出てきたという記憶は私にはありません。そうした哲学的出発点の違いが、ある意味ではムーニエが忘れ去られた原因ではないか。しかし、日本では、あれだけ盛んだった実存主義ブームも忘れ去られています。60年代前後の実存主義の流行が何故消えてしまったのか。用語としてアンガー・ジュマン、ヒューマニズムがありましたが、結局、ドイツ型の実存主義、現象学に基づいて議論していく中で、社会性を持ち得なくて袋小路に入ってしまったので、消えてしまったのだと思います。

今、ムーニエ的な社会的な連帯、個人は社会の中であって、初めて個人として確立できるのだということが重要になってきている。サルトルの中になしに「沈

黙の共和国」という短い文章があるのですが、これはレジスタンスで捕まったときにどうするかというもので、そのときは黙ることが一番みんなのためになるのだ、という主張でした。しかし、ムーニエだったらそうは書かないだろう。彼が現実に行ってきたように、いろいろな人とコネクションをつけながら、集まって人々と何かを作り上げていくことが大事だという、もっとプラスの方向で発想をするのではないか。この両者の考えは非常に対照的なものではないかと思います。それからムーニエはアンガージュマンという言葉すでに戦前に使用しています。彼のサルトル批判の中でも、サルトルのアンガージュマンというものが、個人の孤立したものであると批判しています。

3. 雑誌「エスプリ」について

「エスプリ」は現在も発行されていますことは先ほど申し上げました。創刊から「出会いの場」としての雑誌が目指されました。ムーニエは一号に論文「ふたたびルネサンス」といった題名のものを書いています。彼の言葉の中に、「新しい中世」があります。日本の誰かが少し前に、同じ題名で本を出していますが。このルネサンスはローマ法王の回勅ともリンクしていますが、1930年代のヨーロッパの危機的状況の中で「新しい秩序」、「新しい人間」を模索したものでした。これはフッサールも「ヨーロッパの危機と人間のなんとか」という論文を書いていますけれど。ムーニエは「スピリチュアル革命」というのも書いています。このスピリチュアルも当時の議論の用語でした。さらに第一号には他の人の論文で「個人主義と社会主義」とか「福祉プラン」などがあります。「エスプリ」という雑誌には、その創刊号を見ると、きわめて先進的なテーマ、現在でも通用するテーマが掲載されています。

ムーニエのいう「人格主義革命」というのは、ブルジョア主義的個人主義に対する反対です。個人主義は19世紀ヨーロッパの中で、産業資本家のイデオロギーとして登場してきたという側面があると思います。モナド化したIndivisualismeに対してコミュニティ的なIndivisualisme、人格主義（personalisme）がムーニエのキーワードとなります。

戦後の「エスプリ」については、目次を年代的に見ていきますと、われわれの

関心のある協同、コミュニティ、社会保障の問題など、南北問題などについてきわめて有意義な記事が現在に至るまで出されています。すなわち社会的経済に関わる論説などが多い雑誌となっています。戦後のフランスでムーニエが意図した当時の左翼的知識人の大同団結はうまくいかなかった。当初「現代」はレイモン・アロンも参加していましたが、仲違いしてでていってしまう。サルトルは最後は毛沢東派になってしまった。ある意味ではサルトルの考え方の必然的な結果かなと思います。

4. 人民戦線とビシー政府

ムーニエとの関連で少し戻りますが、フランスの人民戦線とビシー政府などの問題で、当時、なぜカトリック系がスペイン内戦などで積極的な役割を果たしたのかといえば、適切な表現ではないが、ちょうどよい立ち位置であった、と。たとえば、共産党は当時社会ファシズム論を採ったために、人民戦線以前の政治路線では、社会民主主義は反動派と見なして共同戦線はつくれなかった。その中でカトリック系はイデオロギー的には自由に行動ができたのではないか。人民戦線派の経済政策を見ますと、いわゆる賃金問題と資本主義企業の横暴を統制しよう、と書いてあります。最近聞いたような「ルールある資本主義」というような主張が書いてあります。企業の自主管理的な労働者のオートノミー的な視点はあまりない。社会党系、共産党系の人たちにはそうした視点が少なかった。一方、カトリック系の人たちは、フランスでいうと労働者協同組合連合会 SCOP というのがあります。土建屋さんが多いのでスコップとっているわけではありませんが。これは100年の歴史がありまして、ムーニエはそういう運動を視野に入れて、経済民主主義や自主管理を議論している。日本でムーニエの本は過去、二冊訳されています。ひとつは戦後すぐに50年代に「人格主義とはなにか」が訳されています。もうひとつは1970年代に法政大学出版から「アナーキズムと人格主義」が出ています。この中でムーニエはプルードン、マルクス、クロボトキンを論じています。当然ながら、オートノミーの問題、国家と所有の問題を論じています。その中でオウエンにも言及しています。ムーニエは、はっきりと協同組合運動とか自主管理運動とかが頭に入って議論をしている。したがって、当時としては、人民

戦線の主流のイデオロギーはきわめてボルシェビキ的国営化政策を主張していますが、すなわち、コレクティビズム運動がスペイン内戦の時にも活発になりました。とくに南のアンダルシアなどで農地の共同所有などがおこなわれましたが、これらがあまりうまくいかなかったのは、その背後のスターリニズム的なコミューニズムの不十分さの結果だとも言えます。フランス人民戦線の政策の硬直性も同じだと思います。

ビシー政府の関連でいうと、サルトルに「奇妙な戦争」という小説がありますが、これはサルトルの造語ではなくて、当時、奇妙な戦争とよばれていた。なぜかというフランスはビシー政府ができる前にドイツに戦線布告するわけですが、まあやる気がないということで、そのことを奇妙な戦争といった。ムーニエはレズタンスをしていた。サルトルは気象隊に徴兵されて、その後ドイツの収容所から脱走するということがありましたが。

ビシー政府の評価は現在、フランスでも再考されているようです。日本の議論とも重なるかもしれませんが、つまりタブー視するのではなくて、いいところ、悪いところ、ちゃんと歴史を直視しようということがおこなわれているようです。ミッテランの評価とも関わっていたのだと思います。

5. 人格主義とはなにか

ムーニエが1930年代に強調したことは、ヨーロッパのファシズムとナチズムの登場に見られる資本主義の危機をどう克服していくかということでした。自由民主主義という言葉、ナショナリズム国民主義という言葉をもムーニエは否定的に捉えていた。ムーニエが主張しているのはコミュニティ主義です。社会的連帯をどのようにやっていくか、経済と社会の統合をどのようにするのかをムーニエは主張しています。別添の短い文章をお読みください。こういう主張を当時することは、当時の先端的思想であるボルシェビズムなどからすると不十分なものに見えたのではないか。ムーニエが言っているのは、「人間の危機」です。キリスト教的なことは私はよくわかりませんが、ペルソナがキリスト教のキーワードのひとつ、三位一体から来ていて、想像するに、人間はどうして人間になり得るのか、キリスト教だとたぶん神がいて人間ができることになると思います。しかし、神

ただだと、ニーチエのような世界に入ったときに、ICH 自分ということが大事になる。さきほども言いましたが、ドイツ哲学の中で、マルクスも読んだと思いますがシュティルナーの「唯一者と所有」というのがありますが、自分というのが哲学的な中心概念になってくる。これに対して、ムーニエ的に考えると、そういう世界というのは誰もいないせかいである、と。極端に言えば、自分が神になってしまう。自分対自分、対自的存在とか即自的存在というアプローチになってしまう。私ももう少し勉強しなければわかりませんが、ムーニエは「人格主義哲学」の中で、神に変わる新しい人間的な俗化された社会の中では、新しい、他者、複数の人たちと一緒にいること、コミュニケーションの世界の中で自己確立ができるという考えが、ムーニエの考えの一つではないかなと思っています。したがって社会的連帯が重視されるゆえんです。新しい人間とはコミュニティ的人間だと、労働のコミュニティであり、生産機関は国有ではなくて、当時のマルクス主義的な考え方に対して、社会化ということです。ファシズムというものはリベラル個人主義の行き着く先なのだともムーニエは言っています。新しい中世、新しいルネサンスとそのことを象徴的に表現しています。

ムーニエの人格主義は、戦後すぐに、イギリスグループがありました。現代はかなり世界的に広がっています。今年が生誕百年目ということで、「ムーニエ記念国際シンポジウム」がイタリアで開かれました。主としてカトリック的な国とラテンアメリカ、東ヨーロッパ、カナダを含めた国々で、人格主義的運動が盛んに組織されています。彼らがどのようなコンセプトでやっているかという、経済的多元主義というものです。コミュニティデベロップメント、われわれのいう社会的経済的な取り組みに関与しています。

最近開かれている世界社会フォーラムは、ブラジルやインドなどで開かれています。その基本的な思想の一つに回勅やムーニエの人格主義が入っています。

ムーニエはエスプリなど論文の中で、スターリン問題などでゆれがなかった。現在のわれわれが評価しているのと同じような評価をしていた。ですから、ムーニエがもう少し長生きしていれば、違った思想状況があらわれたのかもしれませんが。

6. ムーニエとモンドラゴン

最後に、ムーニエとモンドラゴンということですが、アリスメンディアリエタは神父でしたが、ベルギーのルーバン大学に社会学の勉強に行きたいと言ったのですが、教会は彼をモンドラゴンに派遣しました。アリスメンディアリエタは1930年代のスペイン内戦のときに共和軍に参加したのですが、彼は「エスプリ」の読者でした。アリスメンディアリエタ自身が人格主義者だったと言えます。アリスメンディアリエタの基本的思想についてはアリスメンディの「アリスメンディアリエタの思想」という本では、彼の4つの思想的源泉ということでまとめています。ひとつはキリスト教社会正義、第二はムーニエとマリタンの人格主義、第三にバスクの社会的伝統、第四に協同組合思想です。私が付け加えるに、マルクスなどもアリスメンディアリエタは読んでいたので、これらがアリスメンディアリエタの思想の根本にあつたと言えます。アリスメンディアリエタがフランコ独裁下に、カトリックとして生きたことの問題は先ほどふれました。アリスメンディアリエタがムーニエから得た概念は「労働の尊厳」、「労働の人間化」、「資本の労働への従属」、「コミュニティの重視」などで、これらはモンドラゴンの10原則の中に組み込まれています。やはりムーニエからアリスメンディアリエタへとという流れの中で出てきている原則だと思います。

ジャック・マリタンはムーニエの親友ですが、一般にはマリタンのほうが有名です。なぜかというと、マリタンはトマスの研究など正統派でもあるけれど、戦後アメリカに渡ってアメリカの哲学者になった。英語で書いているので、みんなに読まれた。教育哲学などで有名です。マリタンもフランスにいた頃は、国際バスク友の会というものに入って、スペイン内戦の共和派を支援した。アリスメンディアリエタはマリタンの「統合的人間」という本があるのですが、人格主義哲学を学んだ。そうしてアリスメンディアリエタはモンドラゴン協同組合運動の中で「新しい人間」、「新しい秩序」ということを運動として作りあげていったわけであります。ムーニエは現在ではあまり知られていませんが、ムニエルと訳したほうが一般に記憶にのこったかもしれませんが。現在の日本においてもわれわれの「新しい秩序」を探求すべきときと思います。

付録 1・ムーニエ関連年表

- 1905 グルノーブルにて生まれる。父薬剤師、
- 1924 (19歳) イギリス、労働党政権。
- 1926 (21) ムッソリーニファシスト国家、裕仁即位。
- 1927 (22) ソルボンヌ大学、アグレガシオン（哲学教授資格）合格。
 ハイディガー「存在と時間」、
- 1928 (23) カレー近くでリセ教師となる。
- 1929 (24) アメリカ恐慌、
- 1930 (25) マリタン、ベジャールと親交。
- 1931 (26) ムーニエ、大学教授路線放棄。「エスプリ」発刊準備。
 グルノーブル。
 スペイン共和制、ニザン「アデン・アラビア」、満州占領。
- 1932 (27) 「エスプリ」発刊。ベルグソン「宗教の二源泉」
- 1933 (28) ナチ政権、ユダヤ人追放（フッサール）、
- 1934 (29) 反ファシズム監視委員会に参加。
- 1935 (30) 結婚、ブリュッセル。M「人格主義革命とコミュニティ」、
- 1936 (31) フランス人民戦線政府、スペイン内戦。M「人格主義宣言」
- 1938 (33) 人民戦線政府終わる。ミュンヘン会議。
- 1940 (35) リヨンへ逃亡、ビシー政府。
- 1942 (37) 逮捕、約一年刑務所。
- 1943 (38) 南部に逃亡。サルトル「存在と無」
- 1944 (39) パリへ。
- 1945 ~ 東ヨーロッパ、ドイツ、黒アフリカ、北欧などを旅行。
- 1950 (45) 死去。

付録 2. ローマ法王回勅・キリスト教社会主義・社会正義の意味

- 「Quadragesim Anno」1931.10.2 ⇒ピオ 11 世。教会の社会的ドクトリン（所有、資本と労働・賃金、厚生分配、貧困とプロレタリアート、企業と共同財、階級間の協調、カトリック社会主義、新神学）、社会秩序 *orden social*。ファッション

ズム・コルポラティズムに反対。「人間は社会的なものである」。【一方で、オプスデイの結成】

- 「Rerum Novaum」1891.5.15 ⇒レオ 13 世。非難すべきもの⇒「日曜日は休め、経済とモラルの分裂、ブレーキのない経済の自由、職能アソシエーションの禁止、最大限利益追求、他者を無視した個人、労働者階級の貧困」。提言するもの⇒「労働アソシエーションの権利、労働時間制限、児童労働の禁止、女性労働の保護、公正賃金、社会保障、階級闘争の否定」。「一人より二人」→ 団結と協同。
- カトリック左派。右派は「アクション・フランセーズ」

F I N